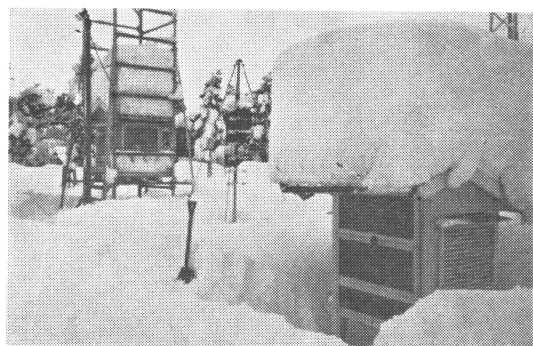


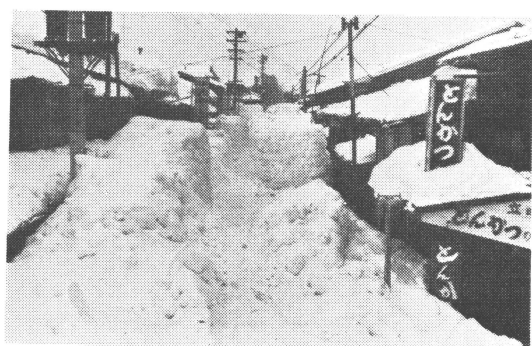
地方だより



露場内の大雪

高田というところは夏来たら、木立の多い、静かなそして町の中の事件も少ない平和な何の変哲もない町である。ところが雪が降って積ると町の様相が一変する。昨年暮から正月にかけて降った雪はアッという間に軒先まで積り、ちょっと大げさな表現をすれば我が家は足下にあるといった状態である。そして雪国特有の活動が始まるのである。それは除雪である。道路や屋根の雪を除かねばどうにもならない。雪氷第22巻6号に掲載されているような除雪機械が主要な道路で活躍する。屋根の雪が1メートルにもなればおろさないと家が危くなる。この地方の人は馴れたもので手際よくスコップで雪を角砂糖を大きくしたような形に切取ってはスコップにのせて抛り投げていく。崩してしまえばは能率が悪いのである。多雪地を汽車で旅された方はお気づきと思うが、線路のわきに積まれた雪は今申したような四角の形の塊がうず高く重り合って視界をさえぎっている。今年は当地も雪は例年に比べて多かったので道路の除雪も始めははかばかしくいかなかった。それでバス、ハイヤー、トラックなどは殆どストップしてしまった。物価は高くなる、雪おろしやおろした雪の始末で金がかかるというわけで、こぼしている人が多かった。特に商買をやっている人は在ごからのお客がサッパリだったので打撃であったろう。人の力以外の輸送機関は一時全くマヒ状態になってしまったのである。しかし雪国の人の辛辛強さというのか、生活力のたくましさというのか全く感心させられる。朝夕の牛乳配達や豆腐屋もソリでやっている。通勤通学は専ら徒歩で、朝のラッシュともなれば雪の田舎道は長蛇の列となる。バスやハイヤーが運休するので、他人の事ながら運転手たちの収入はどうなるのだろうかとうちょっと心配になって聞いてみたところ失業保険を貰うとか、なる程と思った。

高田測候所



高田市仲町道路の雪（昭和36年1月2日写し）

毎日毎日どんよりした雪空ばかり眺めていると本当にお陽さまが恋しくなる。ところが恋しいものがまだあった。国体のスキー大会が開かれるということで2月上旬、市を中心として、毎日セッセと機械力を駆使して主要道路の除雪が行われた。そのおかげで開会式場の付近などには地面が現れてきた。そうだこの地面にももう1ヶ月もお目にかからなかったっけ。本当になっかしかった。私達は上も下も表日本とはまるで違った境をもっ世界に住んでいるのである。

ここは創立が大正11年1月10日ということになっており、建物は創立以来のもので恐らく当時はかなりゆとりを持った、しかもモダンなものであったのだらう。今はFaxや水理水害の測器が入ってきたし、人員も昔に比べれば増えたので、だんだん手狭になってきた。それにもまして庁舎の外観は長い間の風雨雪に痛めつけられて、当市に所在する官公庁の中ではボロ役所の一つにあげられている。それかあらぬか、市で出している市勢要覧の中にある高田測候所と説明のついた写真には風向計とアンテナ柱と空しく写ってはず、大いにひがんだものである。

さて仕事についての紹介が一番あとになってしまったが、余り目新しいものではなく、雪が多いというので若干特別なこともやっているが大部分は事務規程に定められていることを忠実に行なっているに過ぎない。特別なことの一つは百葉箱である。積雪の深さに上げ下げするようになって連続的に変えられないうらみがあるが、まあ結構なものである。研究所で設計製作された重量式積雪量計、これは目下試験観測中であるが、見学者に本体を見せられないのが残念である。この外、雪の測定、雪面上の気温の観測等を現在やっている。

（写真と文、山岸孝次郎）